

第三者評価の受審実績（過去 5 年間）		平成 21、22、23、24、25 年度	
取材の対象年度	平成 24 年度	評価手法	標準の第三者評価

【取材メモ】



取材の視点

- ・第三者評価受審の目的、経緯
- ・事業評価（自己評価）のプロセスで得られた気づき
- ・利用者調査、職員の自己評価及び評価機関による評価の結果から得られた気づき
- ・改善に向けた取り組みとその成果、など

■改善の取り組みとその成果②～利用者家族の不安を和らげるための新たな取り組み

障害者支援施設が時間の経過とともに直面する問題として、利用者の高齢化、重度化にともなう施設設備の改修への対応があります。それについては、平成 26 年度に大規模修繕を計画しており、現場の職員の意見やアイデアを反映した実用的な改修計画の策定が進められています。

もう一つは、利用者の家族に対するサポートの強化と、家族関係の状況に応じた成年後見制度の活用等による利用者の権利擁護の問題です。

家族の中には、利用者本人がそれを望む場合であっても、地域のグループホームへの移行を、「施設を退所させられる」と捉えてしまう受け取り方があるようです。親にしてみれば、障害があることで、幼い頃から利用者・家族とも様々な偏見にさらされ、人には言えない苦勞を重ねながら、親亡き後も本人が生涯を通して安心して暮らせる場所をようやく手に入れることができたという気持ちがあるのだらうと思われます。

そうした家族の思いに寄り添い、不安を和らげるために、事業所では、今年度より開始した保護者交流会において、当事者間のピアカウンセリング的な効果を期待して家族同士のグループディスカッションの時間を設けたり、普段、利用者に対して行っている音楽療法を家族にも体験してもらうといった取り組みを始めています。利用者の幸せと家族の幸せはつながっていると捉えるならば、必ずしも本意でない形で離れて暮らしている家族との時間を少しでも豊かなものにすることが、利用者の QOL を高めることにもつながると考えられます。そうした意味においても、家族に対するサポートの強化は、今後の支援における柱の一つになっていくものと思われます。